



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン創立10周年記念

カンタータの夕べ



’87 3月28日(土)
岩手県民会館大ホール

ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

代表 木村 吉彦

本日は、年度末のお忙しい中、ようこそおいで下さいました。

私共、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは、本年10周年を迎えました。思えば、昭和52年2月、わずか20人足らずのメンバーで「カンタータを歌う会」として発足した私共であります。その我団が、一昨年の「ヨハネ受難曲」を跳躍台として、昨年は、念願の西ドイツ演奏旅行を実現させることができました。これも、ひとえに皆様方の日頃の御支援の賜物と、心より感謝申し上げます。

今回は、演奏旅行の成果と10周年の歩みを皆様に御披露すべく、「カンタータの夕べ」を企画いたしました。「カンタータ・フェライン」とは、「カンタータを歌う仲間」という意味であり、文字通り発足の精神にたちかえってカンタータを歌おうという企画であります。ドイツ・バロックの正統的な音楽を地道に追求していこうという私共の意欲を感じとっていただければ幸いです。

今後とも、皆様からのより一層の御指導・御支援をよろしくお願いいたします。

最後に、指揮者佐々木正利先生をはじめ、オーケストラ・ソリストの諸先生方、後援をいただきました皆様に感謝して、ごあいさつといたします。



J. S. BACH

後援／岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・岩手日報社
岩手放送・テレビ岩手・NHK盛岡放送局・エフエム岩手

プログラム

第1部

J. S. BACH :

KANTATE Nr. 70

“Wachet, betet, seid bereit allezeit” BWV 70

ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲

カンタータ第70番 “目覚め、祈り、心をそなえよ” BWV 70



J. S. BACH :

KANTATE Nr. 102

“Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben” BWV 102

ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲

カンタータ第102番 “主よ、汝の目は信ずるものを見守り給う” BWV102

(休憩・10分)

第2部

H. SCHÜTZ :

GEISTLICHE CHORMUSIK 1648

ハインリッヒ・シュッツ作曲

「宗教合唱曲集」より

Nr. 12. “Also hat Gott die Welt geliebt” SWV 380

“神は実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された” SWV 380

Nr. 14. “Tröstet, tröstet mein Volk” SWV 382

“「なぐさめよ、なぐさめよ、私の民を。」とあなた方の神は仰せられる” SWV382

Nr.20. “Das ist je gewißlich wahr” SWV388

“「キリスト・イエスは罪人を救うためにこの世にこられた。」という言葉はまことである” SWV388



J. S. BACH :

KANTATE Nr.34

“O ewiges Feuer, o Ursprung der Liebe” BWV34

ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲

カンタータ第34番 “おお永遠の炎、愛のみなもと” BWV34

※本日演奏するチェンバロは大内光子^{てる}さんのご好意により、1985年木村雅雄氏製作による
フレーミッシュタイプのものを使用いたします。

プログラムによせて

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
常任指揮者 佐々木 正 利

ドイツ音楽の伝統的継承者の系図を、シェーンベルク、ワーグナー、ブラームス、ベートーヴェン、バッハと遡っていきますと、その源泉として、シュッツという端緒に辿り着きます。音楽の歴史には、過去の流れを大きく集約する立場に立つ大家や、また新しい時代の先駆者となる大家がおります。しかし、稀には、その二つの機能を兼ね揃えた大家も存在するものです。「ドイツ音楽の父」と呼ばれるH・シュッツ(1585—1672)や、更に広く「音楽の父」と呼ばれるJ・S・バッハ(1685—1750)は、正にこの第三の立場に立つ歴史的大家でありました。彼らは、時の流れにあって、それを一歩抜き出して、過去を俯瞰し、未来を予見する鋭いバランス感覚の持ち主であったばかりでなく、常に冷静な目をもって、自分自身を客観化しておりました。彼らの精神的基盤は、M・ルター(1483—1546)の宗教改革の所産たるドイツ・プロテスタンティズムの芸術的展開のうちに求めることができます。すなわち、音楽によって神のみことばを現実化すること、エリート層の言語であったラテン語による聖書を、ドイツ語に翻訳したことに象徴される土俗的な庶民性、自己の個性を保持しながらも、普遍的な真理を追求してやまない謙虚で熱心な学びの姿勢、に特徴づけられる基盤の上に、彼らは堅く立っているのです。シュッツが、ドイツの歴史において、二つの大戦を除いて最も悲惨といわれた30年戦争(1618—1648)下にあって、旧約の預言者の如く、音楽をして人々を慰め、勇気づけたことは大変感銘深いことですが、彼自身、親や妻、子供を次々に失い、音楽上の大親友J・H・シャイン(1586—1630)をも失うに至って、戦争終結の年、「イエス降誕の予言」から「死と来世への確信」に亘るテキストによるガイストリッヒェ・コーアムジーク(1648)を、シャインの思い出として、その奉職地、ライプツィヒ聖トマス教会に献呈したのは、殊更、胸に感動を呼び起こすのです。特に、本日演奏する“Das ist je gewißlich wahr”(それは確かなまことである)は、シャイン追悼のために作られたモテットの改作であり、おそらく、この曲を初めてお聴きになられる方も、シュッツの真意を切に感じとり、感動的に納得さ

れることと思うのです。

シュッツの音楽の特徴をひと言で捉えるなら《言葉と音楽の密接な融合》ということがいえるでしょう。初期においては、ヴェネツィア楽派の華麗なる響きに心を奪われ、中期においては、C・モンテヴェルディ(1567—1643)のモノディ様式を取り入れ、ドラマティックな朗唱形態を駆使したシュッツも、晩年には、手段が手段だけで先走りすることを厳しくいましめ、目的を越えた過度の技法に強い懸念をみせるに及んで、聖書のテキストに潜む意味の位層を深く掘り下げること成功したのです。彼自身、格別な意義をもって評価しているガイストリッヒェ・コーアムジークの力強い序文はこう語ります。

『対位法の規則を充分に学ぶことなしには、経験のある作曲家の作品は何一つ生まれません。またそれを学ぶには、生きた声によることが望ましい。そうでなければ、すべての音楽の営みは、からのくるみ程の価値もない。私は、若い人に良い刺激を与え、正しい作曲法の基礎を示すため、この曲集を出版したいと思う。それによって、祖国の音楽の榮譽が善意のうちに高められることを切に願う。』と。

シュッツのこの伝統は、約100年の年月を経て、確実にバッハに受け継がれていきました。己れの生を完成させるべく心血を注いだシュッツの軌跡は、バッハの出現によって、すべてが一つに集められ、史上稀なる花を開かせることになったのです。バッハもまた、職業を神の召命と受けとめるプロテスタント的信仰に裏づけられた職人気質をもっておりました。その進取的な精神は正にシュッツの歩んだものであります。生涯中400曲(現存は約230曲)にも及ぶ彼のカンタータには、様々な国の、様々な様式、形態が取り入れられております。それら数えきれぬ程の名作の数々が、今、再び音に還る時を待っているのです。

ドイツで生まれ、ドイツで育った音楽を、日本で、日本人が演奏していくことが、果たしてどういう意味をもつのか、ということは、いつも避けては通れない命題ですが、ただ単に好きだから、というだけで集まった10年前の私達は、すべてが無に等しい状態でありま

した。しかし、たった10数名でも、現実の許された範囲で、その時々可能なことを試みることに、喜びをもって取り組んでいたものです。その時、本当に頼りになったのは、絶えず私達を奮い立たしてやまないバッハの音楽の深遠な魅力であり、より現実的には、東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの心強い応援でした。我が師小林道夫先生の比類なき御指導と、快く数回共演を承諾して下さいた当時のカンタータ・クラブ団員には心より感謝致しております。その後、私達にとって、画期的ともいえるヨハネ受難曲公演('85,3)を経て、現在があることを思えば、万感胸にこみ上げ

るものがあります。今、満10歳を迎え、時代を越え、宗派を越えて人々に感動を呼び起こすバッハの音楽の本質を再認識する時、その源として脈々と流れるドイツ・プロテスタントの音楽精神に、外に持つものが極端に乏しい私達も、心から勇気づけられるのです。来年は11年目の門出にふさわしい「ロ短調ミサ曲」の演奏が予定されています。毎年メンバーは入れ替わりますが、自己のエネルギーの根源を明らかにし、永遠を見つめて、学ぶところの多い人類の貴重な音楽遺産を享受できる喜びにこそ、私達の心を強く結ぶ絆を見い出せるのではないかと思うのです。

プロフィール



佐々木 正 利
(指揮・テノール)

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程及び博士後期課程修了。声楽を畑中良輔、須賀靖元、小林道夫、森明彦の各氏に、楽理を服部幸三、角倉一朗の各氏に、作曲を松本民之助氏に、宗教音楽を岳藤豪希氏に師事。

芸大在学中より、バロックから現代に亘る宗教作品、特にJ.S.バッハの声楽曲に深い造詣を示し、芸大メサイア公演、定期演奏会をはじめ、大学、一般合唱団と多数共演。特に1978年芸大マタイ受難曲公演にて、福音史家として高く評価され、以後そのスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。

1979年シュトゥットガルトに渡り、ローレ・フィッシャー教授に師事。同年南ドイツにて数回歌曲リサイタルを開き好評を博す。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年まで、デットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、ヘルムート・クレッチマール教授に師事。この間、同大学定期演奏会でドヴォルザーク「レクイエム」のテノール・ソロを務めたのをはじめ、ドイツ、オーストリア、スイス、フランス、オランダ、ベルギー各地で

一流オーケストラ、合唱団と多数共演。1980年ウィーン楽友協会ホールにおける「マタイ受難曲」においては「若き日のペーター・シュライヤー」と新聞各紙で絶賛される。1982年ハンブルク、ブリュッセルの「ロ短調ミサ」では特に高い評価を得た。帰国後もN響、読響、都響、日フィル、新日フィル、東響等の定期演奏会に出演し、K・マズア、H・プロムシュテット、H・リリング、H・ヴィンシャーマン、小沢征爾、秋山和慶の各氏等と共演。1985年ザルツブルク音楽祭に招かれ、R・バーダー指揮のベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊、ザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団とバッハ、モーツァルトのソロを歌い、好評を博す。滞独中オペラでは、コシ・ファン・トゥッテ(フェランド)、フィデリオ(ヤッキーノ)、スカララッティ・グリゼルダ(コッラード)等出演。現在までリサイタル8回、NHK・FMリサイタル3回等歌曲の分野でも活躍。長年に亘り、小林道夫氏のもと、東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの指揮者を務め、後進の指導にあたる。

又、本年8月仙台にて行われる、H・リリング音楽監督のバッハ・アカデミーに於いて、フッテンロッハー(Bass)、ゴリツキー(ob)、エアハルト(cemb)等世界一流の演奏家と共に講師(テノール・ソロ・マスター・クラス)を務めることになっている。

現在、岩手大学教育学部音楽科助教授。二期会会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団常任指揮者。



鈴木 雅 明
(チェンバロ)

神戸に生まれる。12歳より教会のオルガニストを務め、東京芸術大学作曲科にて、故矢代秋雄氏に師事。卒業後、同大学大学院オルガン科に於いて、広野嗣雄氏に師事すると共に、古楽研究会に於いて、チェンバロを鍋島元子氏に学んだ。さらに1979年より、アムステルダム・スウェーリンク音楽院に進み、チェンバロをトン・コープマン氏、オルガンをピート・ケー氏に師事。同大学院よりチェンバロとオルガン双方のソリスト・ディプロマを得た。その間、1980年には、ブルージュ国際チェンバロ・コンクール（通奏低音部門）において第2位（1位なし）、1982年には、同オルガン・コンクールに第3位入賞を果たした。西ドイツ・デュイスブルグ国立音楽大学講師を経て、現在、松蔭女子学院大学（神戸）、及び、桐朋学園大学（東京）にて教鞭をとっている。

松蔭女子学院大学に於いては、特別に音響設計されたチャペルとマルク・ガルニエ製作によるフランス・クラシックオルガンを用いて積極的にコンサートシリーズを企画する他、全国各地でチェンバロ・オルガン奏者及び指揮者として演奏活動を行い、またオランダ、ドイツ、フランスを中心とするヨーロッパ各地では、毎年コンサート・ツアーを行っている。とくに昨年夏のオランダ・ハーレムでのリサイタルでは、“オルガンを知りつくした生気あふれる雄大な演奏……”と紙上で絶賛された。

プロテスタント教会音楽の研究も手がけ、特にカルヴァンの詩篇歌の普及に努めている。日本キリスト改革派東京恩寵教会オルガニスト。



菅 英 三 子
(ソプラノ)

京都市立芸術大学卒業。〈稲畑・中原賞〉受賞。日本演奏連盟推薦演奏会等、東京、大阪、京都、仙台にてジョイント・コンサートに出演の他、各種演奏会にて、バッハ「ロ短調ミサ」「カンタータ30番、147番、210番」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「レクイエム」、ベートーヴェン「交響曲第九番」、フォーレ「レクイエム」等のソリストをつとめる。

1983年仙台にてジョイント・リサイタルを、1984～1986年仙台にて毎年リサイタルを開催する。

長谷川美津子、小室彰子、佐々木成子各氏に声楽を、木下武久氏に発声法を師事。また、アーリーン・オジェー、ライナー・ホフマン各氏の指導を受ける。

日本演奏連盟、宮城県芸術協会、仙台宗教音楽研究会各会員。



H·SCHÜTZ



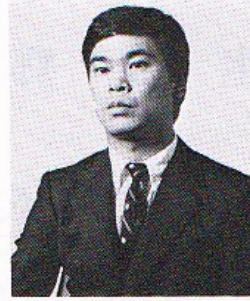
佐々木 まり子
(アルト)

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱科修了。毎日学生音楽コンクール西日本一位。NHK新人演奏会出演。伊藤亘行、森明彦の両氏に師事。

学部在学中より小林道夫氏のもとにおける東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブ演奏会において数多くのカンタータ、オラトリオのアルト・ソロを受け持つ。又、大学合唱団及び一般合唱団と多数共演。モーツァルト「レクイエム」「戴冠ミサ」、ヘンデル「メサイア」、バッハ「ロ短調ミサ」などに出演する。1980年にデットモルト北西ドイツ音楽大学に留学し、ヘルムート・クレッチマール教授に師事。その間、北ドイツにおいて、バッハを中心とした宗教音楽演奏会に数多く出演。ヒルデスハイムにおける「アルト・ソロ・カンタータ」、ミュンスターにおけるC・Ph・E・バッハの「マニフィカート」は新聞紙上で絶賛される。

帰国後もH・ヴィンシャーマンとの共演をはじめ、「マタイ」「ヨハネ」両受難曲、「ロ短調ミサ」「クリスマスオラトリオ」、多数のカンタータ、ヘンデルの「メサイア」「エジプトのイスラエル人」、メンデルスゾーンの「エリア」などオラトリオのソリストとして、東京を中心に、札幌、仙台、横浜、名古屋の各地で演奏活動を行なっている。

1985年には西ドイツのオルデンプルク、アーヘンにて、ヘンデルの「プロッケス受難曲」、バッハの「復活祭オラトリオ」のアルト・ソロを歌い、1986年にも「メサイア」のソリストとして渡独。



水野 賢司
(バス)

東京芸術大学卒業。同大学院修了。在学中安宅賞受賞。伊藤亘行、芳野靖夫両氏に師事。1979年、1984年に渡独、ニュルンベルクにて、ウェルナー・ヤコブ氏より多くを学ぶ。毎日コンクール2位、日伊コンクール2位入賞。芸大「メサイア」のソロを歌う。皇居にて御前演奏を行う。オペラでは、ヴェルディ「リゴレット」、吉川和夫「金壺親父恋達引」、12世紀典礼オペラ「ダニエル物語」、青島広志「たそがれは逢魔の時間」「黄金の国」、ブリテン「真夏の夜の夢」、演奏会形式によるレオンカヴァルロ「道化師」およびマスカーニ「カヴァレリア・ルスティカーナ」等に出演。

バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「クリスマスオラトリオ」「マニフィカート」多数の「カンタータ」等、ヘンデル「メサイア」「エフタ」「エジプトのイスラエル人」「デッティンガー・テデウム」等、ハイドン「天地創造」、ベートーヴェン「第九」、ロッシニ「スターパト・マーテル」、モーツァルト、プラームス、フォーレの「レクイエム」等のソリストとして数多く出演。

ドイツ・リートのリサイタルで、シューマン「詩人の恋」「ケルナー歌曲集」、シューベルト「美しき水車小屋の娘」「冬の旅」を歌う。他にニーチェ、シェーンベルク、アドルノ、ヴォルフの歌曲等を演奏。

日本の若手作曲家に新作を委嘱して『THE WORLD OF KENJI』のタイトルでユニークなリサイタルを主催する。淡海悟郎；歌曲集「優しき歌」「暁と夕の詩」「死者の書I、II」「珍・加腐立痴男」(水野賢司作詞)、山本泰久「セロ弾きのゴーシュ」、藤原嘉文「ドン・キホーテ」「ピエロ」(水野賢司作詞)、吉川和夫「昔噺・狼と飛脚」(水野賢司作詞)等の曲を初演して好評を博し、再演される等、幅広い活動をくり広げている。



蒲 生 克 郷 (コンサートマスター)

1976年東京芸術大学卒業。NHK・FM「夕べのリサイタル・新人演奏会」に出演。1976～78年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場管弦楽団に在籍の傍ら、ヴェルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。また、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスターを務める。帰国後は憩弦楽四重奏団、東京バロック・アンサンブル、東京バッハ・アカデミー等の室内アンサンブルで活躍する一方、芸大バッハ・カンタータ・クラブ、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、盛岡バッハ・アンサンブルの指揮者を務める。現在、久合田緑弦楽四重奏団、芸大バッハ・カンタータ・クラブ各メンバー。

水戸バッハコレギウム常任指揮者。東京芸術大学管弦楽研究部講師。故多久興、海野義雄、ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京芸術大学の学内サークルとして活動しているバッハ・カンタータ・クラブのOBを中心に、バッハの宗教曲等の演奏会のために編成された室内オーケストラである。母体となっているバッハ・カンタータ・クラブは1970年に創立、顧問に服部幸三教授、指導・指揮に小林道夫氏を迎え、現在に至る迄、毎年の定期公演を中心に活動を続けている。

<ヴァイオリンⅠ>

蒲 生 克 郷(コンサートマスター)
服 部 暁 美
庄 司 真 澄
石 井 優 子

<ヴァイオリンⅡ>

川 原 埴 真
三 溝 あけみ
富 安 美 穂

<ヴィオラ>

李 善 銘
上 田 恭 子

<チェロ>

田 崎 瑞 博
斎 藤 真紀子

<コントラバス>

蓮 池 仁

<フルート>

I. 田 野 道 子
II. 田 野 秀 康

<オーボエ>

I. 小 畑 善 昭
II. 安 原 理 喜
III. 菊 池 克 江(岩大音楽科1年)

<ファゴット>

寺 下 徹

<トランペット>

I. 海 保 泉
II. 目 良 佳 延
III. 坂 井 俊 博

<ティンパニ>

松 倉 利 之

<チェンバロ>

鈴 木 雅 明

ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲

カンタータ第70番“目覚め、祈り、心をそなえよ” BWV70

初演：1716年（原作・BWV70a・ヴァイマル）、

1723年（改作・BWV70・ライプツィヒ）

用途：三位一体節後第26日曜日用

聖句：書簡、第2ペテロ3章3～13節

福音書、マタイ25章31～46節

歌詞：ザーロモ・フランク

このカンタータは音楽の「目覚まし時計」である（ほんとうは、起きている人に「眠らないようにしなさい」と悟しているのだが）。誰でも毎朝お世話になるあのけたたましいベルの音や「ピッピッ」とクレッシェンドしていく不気味なモーニングコールは、起こされてもただ腹立たしく恨めしいだけだが、このカンタータを耳にすると、進んで、「起きよう！」という気持ちになる。爽やかに目覚め、そして曇りのない心で祈ることの喜びが健康的にすら感じられる。バッハは肉体だけでなく、「精神の眠気」をも生気に満ち溢れた活発な身振りにより取り除き、信仰に対する元気回復を図っているようだ。

[Erster Teil]

1. Chor

Wachet, betet, seid bereit allezeit,
bis der Herr der Herrlichkeit dieser Welt ein Ende
machet.

2. Recitativo (Bass)

Erschrecket, ihr verstockten Sünder!
Ein Tag bricht an, vor dem sich niemand bergen
kann.
Er eilt mit dir zum strengen Rechte,
o! sündliches Geschlechte, zum ewigen Herzeleide.
Doch euch, erwählte Gotteskinder, ist er ein Anfang
wahrer Freude.
Der Heiland holet euch, wenn alles fällt und bricht,
vor sein erhöhtes Angesicht: drum zaget nicht!

3. Aria (Alto)

Wenn kömmt der Tag, an dem wir ziehen aus dem
Ägypten dieser Welt?
Ach, laßt uns bald aus Sodom fliehen,
eh' uns das Feuer überfällt.
Wacht, Seelen, auf von Sicherheit und glaubt,
es ist die letzte Zeit!

[第1部]

1. 合唱

目をさまして祈り、いつも準備を怠らずにいなさい。
栄光の主が、この世に最後の審判をくださる日まで。
(合唱・トランペット・オーボエ・弦楽器・通奏低音/80小節・
ハ長調・4分の4拍子)

2. レチタティーヴォ (バス)

恐れなさい。かたくなな罪人^{つみびと}たちよ。
誰一人として逃れることのできない最後の日が来るこ
とを。
その日は、容赦のない裁きを汝らにもたらし、
おお、罪深き者たちよ、永遠の心痛に悩まされること
になるのだ。
けれども汝ら、選ばれたる神の子よ、その日は真の喜
びの始まりでもある。
救い主は、たとえすべてのものが滅びたとしても汝ら
を迎え、
主の高貴なる顔の前まで連れていってくれる。
決して臆することはない。

(バス・トランペット・オーボエ・弦楽器・通奏低音/18小節・
ヘ長調一イ短調・4分の4拍子)

3. アリア (アルト)

いつ来るのでしょうか。私たちがこの世の闇の中から
引き上げられる日が。
ああ、炎が私たちを取り巻く前に、
はやく私たちをソドムから逃がしてください。
目ざめていなさい、魂よ。最後のときは、まちがいな
くやって来るのであるから。

(アルト・チェロ・通奏低音/92小節・イ短調・4分の3拍子)

4. Recitativo (Tenor)
 Auch bei dem himmlischen Verlangen hält unser
 Leib den Geist gefangen;
 es legt die Welt durch ihre Tücke den Frommen
 Netz und Stricke.
 Der Geist ist willig, doch das Fleisch ist schwach;
 dies preßt uns aus ein jammervolles.
 Ach!
5. Aria (Soprano)
 Laßt der Spötter Zungen schmähen,
 es wird doch, und muß geschehen
 daß wir Jesum werden sehen auf den Wolken
 in den Höhen;
 Welt und Himmel mag vergehen,
 Christi Wort muß fest bestehen!
6. Recitativo (Tenor)
 Jedoch! bei dem unartigen Geschlechte denkt Gott
 an seine Knechte,
 daß diese böse Art sie ferner nicht verletzt,
 indem er sie in seiner Hand bewahrt
 und in ein himmlisch Eden setzt.
7. Choral
 Freu' dich sehr, o meine Seele,
 und vergiß all' Not und Qual,
 weil dich nun Christus, dein Herre, ruft aus diesem
 Jammertal!
 Seine Freud und Herrlichkeit sollst du sehn in
 Ewigkeit,
 mit den Engeln jubilieren, in Ewigkeit triumphieren.

[Zweiter Teil]

8. Aria (Tenor)
 Hebt euer Haupt empor und seid getrost,
 ihr Frommen, zu eurer Seelen Flor!
 Ihr sollt in Eden grünen, Gott ewiglich zu dienen.
9. Recitativo (Bass)
 Ach, soll nicht dieser große Tag, der Welt Verfall,
 und der Posaunen Schall, der unerhörte letzte
 Schlag,
 der Richters ausgesprochne Worte,
 des Höllenrachsens off'ne Pforte in meinem Sinn
 viel Zweifel Furcht und Schrecken der ich ein Kind
 der Sünden bin, erwecken?

4. レチタティーヴォ (テノール)
 天国からのよびかけにもかかわらず、私たちの肉体は
 精神を捕えたままである。
 地上には、肉の奸計による策略やわながあふれている。
 精神には意志がある。しかし肉体をもつ人間は弱い。
 この事実が、私たちを無惨に押しつぶしているのだ。
 ああ。
 (テノール・通奏低音／9小節・二短調一ホ短調・4分の4拍子)
5. アリア (ソプラノ)
 神をあざける者の中傷を放っておきなさい。
 それでも私たちは、イエスが天空の雲の上にありますの
 を目のあたりにするだろう。
 地上と天上の違いは消え去り、
 キリストの御言葉のみが確かなものとして残る。
 (ソプラノ・弦楽器・通奏低音／41小節・ホ短調・4分の4拍子)
6. レチタティーヴォ (テノール)
 しかし! その御心を顧慮しない私たちであるにもかか
 わらず、神は、私たちのことを考えてくださり、私た
 ちの不心得が、これ以上私たちを苦しめないようにし
 てくださっている。そうすることで、神は、私たちを
 御手の中に置き、天国の園に置いてくださるのである。
 (テノール・通奏低音／8小節・ト長調・4分の4拍子)
7. コラール (合唱)
 喜びなさい、私の魂よ。
 悩み、苦しみはすべて忘れなさい。
 今、この時、汝の主イエス・キリストが汝に呼びかけ
 ているからである。
 主の祝福と栄光を汝は永遠に見るであろう。
 汝は、天の御使いたちとともに歓声を挙げ、永遠の勝
 利に酔いしれるだろう。
 《喜びなさい、私の魂よ》(フライベルク・1620年)の最終節。
 (合唱・トランペット・オーボエ・弦楽器・通奏低音／34小節・
 ト長調・4分の3拍子)

[第2部]

8. アリア (テノール)
 頭を上げ、安心していなさい、敬虔な心よ。
 汝の魂を花で飾りなさい。
 汝は、エデンの園で若さをとりもどし、神に永遠につ
 くすことになるだろう。
 (テノール・オーボエ・弦楽器・通奏低音／52小節・ト長調・4
 分の4拍子)
9. レチタティーヴォ《コラール付き》(バス)
 ああ、世界の終わりの、この大なる日が、
 そして、ラッパの響きが、かつてない最後の一撃が、
 まぎれもない審判者の言葉が、
 罪の子である私の、不審の念と恐怖心とに対して、
 地獄の淵が扉を開けて私を待つ、そんな日が来るので
 はないか。

Jedoch, es gehet meiner Seelen ein Freudenschein,
ein Licht des Trostes auf.

Der Heiland kann sein Herze nicht verhehlen,
so vor Erbarmen bricht, sein Gnadenarm verläßt
mich nicht.

Wohlan! so ende ich mit Freuden meinen Lauf.

10. Aria (Bass)

Seligster Erquickungstag, führe mich zu deinen
Zimmern.

Schalle, knalle, letzter Schlag!

Welt und Himmel geht zu Trümmern!

Jesus führet mich zur Stille, an den Ort, da Lust die
Fülle.

11. Choral

Nicht nach Welt, nach Himmel nicht meine Seele
wünscht und sehnet, Jesum wünsch' ich und sein
Licht, der mich hat mit Gott versöhnet, der mich
freiet vom Gericht, meinen Jesum laß ich nicht.

けれども、私の魂は、喜びに満ち、

なぐさめの光に照らされている。

救い主は、御心をお隠しになるはずもなく、慈悲の心
をおやめになることもない。その恩寵はあわれな私を
離れることがない。

さあ、私は喜んで、生涯の幕を閉じよう。

(バス・トランペット・弦楽器・通奏低音/31小節・ホ短調一ハ
長調・4分の4拍子)

10. アリア (バス)

静けさに満ち、さわやかな日が、私をあなたの部屋に
連れていきます。

響き、破裂音、最後の一撃!

天地が粉々に砕ける!

イエスが、私を喜びに満ちた、静かな場所へと導いて
行く。

(バス・トランペット・弦楽器・通奏低音/68小節・ハ長調・4
分の3拍子)

11. コラール (合唱)

私の魂が望んでいるのは、地上でも天上でもありませ
ん。私が望むのは、イエスその人と、イエスが与えて
くれる希望の光です。イエスは、私の罪を贖い、最後
の審判から解き放つてくれました。

私は、イエスのみもとを決して離れません。

Chr. カイマンのコラール《私はイエスのみもとを決して離れ
ません》の第5節

(合唱・オーボエ・トランペット・弦楽器・通奏低音/13小節・
ハ長調・4分の4拍子)

ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲

カンタータ第102番“主よ、汝の目は信ずるものを見守り給う” BWV102

初演：1726年、ライプツィヒ

用途：三位一体節後第10日曜日用

聖句：書簡、第1コリント12章1～11節

福音書、ルカ19章41～48節

歌詞：作詞者不明

曲の冒頭、オーボエの優しくも物悲しい音色で奏されるテーマ。思わず身も心も委ねたくなる微妙な揺れと流れ。あの、モーツァルトの交響曲第40番のテーマを少しゆるやかにしたような心地よさに我々の気持ちはまず引きよせられる。バッハは、我々が「何でも言う事を聞きます。」という心持ちになった頃を見計らって総攻撃を仕掛けて来るのだ。すなわち、目を見張るような合唱フーガや彫りの深いアリア、そして最後の最後まで問題意識の塊のようなコラールによって、バッハは、全ての人々に「悔い改めよ!」と強く訴えかけているのである。

[Erster Teil]

1. Chor

Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben;

du schlägest sie, aber sie fühlen es nicht,

du plagest sie, aber sie bessern sich nicht!

Sie haben ein härter Angesicht denn ein Fels,

und wollen sich nicht bekehren.

[第1部]

1. 合唱

主よ、あなたはいつもわれわれの信仰を見守っておられます。

主は、不信仰な者たちを打ちのめすが、彼らは、意に介さない。

主は、不信仰な者たちに苦痛を与えるが、彼らは悔い改めない。

不信仰な者たちは、岩よりももっと険しい表情をするが、決して回心しようとはしない。

(合唱・オーボエ I, II・弦楽器・通奏低音/118小節・ト短調・4分の4拍子)

2. Recitativo (Bass)

Wo ist das Ebenbild, das Gott uns eingeprägt,
wenn der verkehrte Will sich ihm zuwider leget?
Wo ist die Kraft von seinem Wort,
wenn alle Besserung weicht aus dem Herzen fort?
Der Höchste suchet uns durch Sanftmut zwar zu zähmen,
ob der verirrte Geist sich wollte noch bequemem,
doch, fährt er fort in dem verstockten Sinn,
so gibt er ihn ins Herzens Dünkel hin.

3. Aria (Alto)

Weh! der Seele, die den Schaden nicht mehr kennt!
und, die Straf auf sich zu laden, störrig rennt,
ja, von ihres Gottes Gnade selbst sich trennt.

4. Arioso (Bass)

Verachtest du den Reichtum seiner Gnade, Geduld,
und Langmütigkeit?
Weißest du nicht, daß dich Gottes Güte zur Buße
locket?
Du aber nach deinem verstockten und unbußfertigen
Herzen häufest dir selbst den Zorn auf den Tag des
Zorns,
und der Offenbarung des gerechten Gerichts Gottes.

2. レチタティーヴォ (バス)

神が私たちに刻印した似姿はどこにあるのか。
神にそむく心は、いつになったら静まるのか。
神の御言葉による力はどこにあるのか。
すべての改心は、いつになったら心から神聖なものになるのか。
至高の神は、私たちをやさしく導こうとしている。
誤った精神が、神の教えにいやいやながら従うことがないように。
誤った精神が、かたくななままで歩みを進めることのないように。
誤った精神が、慢心に陥ることのないように。
(バス・通奏低音/13小節・変ロ長調・4分の4拍子)

3. アリア (アルト)

災いなるかな、痛めつけられた魂よ。
負わされている苦痛が、容赦なく突きささる。
そうだ、神の恩寵から引き離されたままなのだ。
(アルト・オーボエ・通奏低音/55小節・ヘ短調・4分の4拍子)

4. アリオゾ (バス)

汝は、神の豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじるのか。
汝は、神の慈愛が汝を悔い改めに導くことを知らないのか。
かたくなで悔い改めのない心のゆえに、
汝は、神の正しいさばきが現われる怒りの日にむかって
神の怒りを自分の身に積んでいるのである。
(バス・弦楽器・通奏低音/147小節・変ホ長調・8分の3拍子)

[Zweiter Teil]

5. Aria (Tenor)

Erschrecke doch, du allzu sichere Seele!
Denk, was dich würdig zähle der Sünden Joch.
Die Gottes = Langmut geht auf einem Fuß von Blei,
damit der Zorn hernach dir desto schwerer sei.

6. Recitativo (Alto)

Beim Warten ist Gefahr;
willst du die Zeit verlieren?
Der Gott, der ehemals gnädig war, kann leichtlich
dich vor seinen Richtstuhl führen.
Wo bleibt sodann die Buß?
Es ist ein Augenblick, der Zeit und Ewigkeit,
der Leib und Seele scheidet.
Verblend'ter Sinn, ach, kehre doch zurück,

[第2部]

5. アリア (テノール)

おそれなさい。あまりにもかたくなな魂よ!
考えなさい。罪のくびきを数えあげることの意味を。
神の忍耐は、足かせのうえにあり、
それに伴う怒りは、悔い改めが遅ければ遅いほど厳しい。
(テノール・フルート・通奏低音/104小節・ト短調・4分の3拍子)

6. レチタティーヴォ (アルト)

改心を引き延ばすことは危険だ。
汝は、その時機をなくすつもりなのか。
かつて寛大であった神は、いともたやすく
汝を審判の座につかせることができるのだ。
その後悔い改める余地は残されていない。
一瞬にして、その時から永遠に
肉体と魂が分離してしまう。
盲目的な分別よ、あらためて自覚するがいい。

daß dich dieselbe Stund nicht finde unbereit!

7. Choral

- (1) Heut' lebst du, heut' bekehre dich, eh morgen kommt, kann's ändern sich:
wer heut' ist frisch, gesund und rot, ist morgen krank, ja wohl gar tot. So du nun stirbest ohne Buß', dein Leib und Seel' dort brennen muß.
- (2) Hilf, o Herr Jesu, hilf du mir, daß ich noch heute komm' zu dir und Buße tu' den Augenblick, eh' mich der schnelle Tod entrück;
auf daß ich heut' und jederzeit zu meiner Heimfahrt sei bereit.

ああ、今この時にも準備ができているという事実を。
(アルト・オーボエ I, II・通奏低音/14小節・ハ短調・4分の4拍子)

7. コラール (合唱)

- (1) 明日が来る前に、今日のうちに悔い改めなさい。
状況が変わるかもしれないのだから。今日はつらつと過ごしている者が、明日には病いに倒れ、死に到ることさえあるのだ。悔い改めないままに死ぬならば、その時汝の肉体と魂は、苦しみにさいなまれるであろう。
- (2) おお、主イエスよ、私を救ってください。私は、今日ようやくあなたのもとにあり、突然の死が私を襲う前に悔い改めます。
この悔い改めによって、私は、いつも死の旅路への準備ができているのです。
旋律：M・ルター《天にいます私たちの父よ》の引用
歌詞：J・ヘルマン《私が誠実に生きるようにと神は語る》(1630)の第6、7節
(合唱・オーボエ I, II・弦楽器・通奏低音/24小節・ハ短調・4分の4拍子)

ハインリッヒ・シュッツ作曲

「宗教合唱曲集」(1648)より

〈シュッツ＝ルネサンス〉

シュッツは「渋い」。近頃の日本語では何でもかんでも「シブイ」で表現してしまうので、却って意味不明な形容詞になってしまった感があるが、それでもシュッツの音楽を一語で言い表わそうとすると、やはり「渋い」を使いたくなる。国語辞典によれば「渋い」は「派手でなく、落ち着いた深い趣がある」とか「はでやかでなく雅致がある」ということらしいが、この一見（一聴？）無骨で地味な音楽が、現代の我々にとって新鮮に、生気に満ち溢れて響くことに不思議な感動を覚える。シュッツ研究家のW・ビッティンガーは、現代までに2回の「シュッツ＝ルネサンス」があった事を指摘した。即ち、150年以上もの間埋れた作曲家であったシュッツを2度に亘って掘り起こした事実を告げている。第1回は19世紀前半から中頃にかけて。中でも1864年、ブラームスがシュッツの「シンフォニア・サクレ」をウィーンで演奏したというのは興味深い。重厚で、いかにも「ドイツ！」という響きがしたのではないだろうか。そして第2回が今世紀の数十年に及ぶ研究活動と、全作品の国境を越えた普及である。これらの「シュッツ＝ルネサンス」のお陰で本日、我々もシュッツの「宗教合唱曲集」を演奏できるのだと思うと、誰にしてもよいかわからない感謝をしたくなる。それにしても、我々にとっては毎日が「シュッツ＝ルネサンス」みたいなものであった。何も知らないのに再発見というもおかしいが、はじめは何の変哲もない、ただの音の塊みたいなのが、歌うたびに「こういう音、こういう響き！」と歌う側に要求しはじめ、遂に我々もなんとなくではなくじっくりと落ち着く所を求めたくなる。「シュッツの音楽はまさに『ドイツ語を話す』のである。」とゲオルギアードスは言ったが、そのドイツ語以上にドイツ語的な音楽により語られる確固たる信仰が、我々に「落ち着きたい」と思わせるところなのかもしれない。

Nr. 12. Also hat Gott die Welt geliebt (SWV 380)

Also hat Gott die Welt geliebt daß er seinen eingebornen Sohn gab,
auf daß alle die an ihn glauben nicht verloren werden, sondern das ewige Leben haben.

12. 神は、かくもこの世を愛された (SWV380)

神は、そのひとり子をお与えになったほどにこの世を愛された。
そのひとり子を信じる者はみな、けっして見捨てられることはなく、永遠の生命を得るためである。

〈ヨハネによる福音書 3章16・17節〉

(S・A・T・T・B)

Nr. 14. Tröstet, tröstet mein Volk (SWV 382)

Tröstet tröstet mein Volk,
redet mit Jerusalem freundlich,
prediget ihr, daß ihre Ritterschaft ein Ende hat,
denn ihre Missetat ist vergeben, denn sie hat
zweifältiges empfangen von der Hand des Herren
um alle ihre Sünde.
Es ist eine Stimme eines Predigers in der Wüste:
Bereitet dem Herren den Weg, machet auf dem
Gefilde ebene Bahn unserm Gott.
Alle Tal sollen erhöht werden, und alle Berge und
Hügel sollen erniedriget werden,
und was ungleich ist, soll eben werden,
und was höckerig ist, soll schlecht werden, denn die
Herrlichkeit des Herren soll offenbar werden.
Und alles Fleisch miteinander wird sehen,
daß des Herren Mund redet.

Nr. 20. Das ist je gewißlich wahr (SWV 388)

Das ist je gewißlich wahr und ein teuer wertenes Wort
daß Christus Jesus kommen ist in die Welt die
Sünder selig zu machen unter welchen ich der
fürnehmste bin.
Aber darum ist mir Barmherzigkeit widerfahren
auf daß an mir fürnehmlich Jesus Christus erzeugete
alle Geduld
zum Exempel denen die an ihn glauben sollen zum
ewigen Leben.
Gott dem ewigen Könige, dem Unvergänglichen und
Unsichtbaren
und allein Weisen sei Ehre und Preis in Ewigkeit.
Amen.

**14. なぐさめてください、なぐさめてください、私の民を
(SWV382)**

なぐさめてください、私の民を。
エルサレム（ユダヤの民）と親しく語ってください。
服役の期間が終わったことを伝えてください。
汝らの罪は宥されたのだから。この罪の宥しは、もろ
もろの罪にもかかわらず、神から受けた二重の恩恵な
のである。
荒野で叫ぶ者の声とする。
主のために道を用意しなさい。主のために野原にまっ
すぐな道をつくりなさい。
すべての谷は高められ、すべての山と丘は低められ、
けわしいところは平らになり、
でこぼこなところはならされる。
そして、主の栄光があらわれる。
すべての人間は、主の口が語ることを皆ともに見るで
あろう。

〈イザヤ書40章1～5節〉
(S・S・A・T・T・B)

20. その言葉はまことである (SWV388)

常に真実であり、価値のある言葉、それは、
「キリスト・イエスが罪人を救うためにこの世にいら
した」という言葉である。私は、罪人の中でも最もき
わだった者である。
しかし、私に与えられているあわれみとは、何よりも
イエス・キリストが私に対して限りない寛容を示して
くださり、
神を信じる者は永遠の生命を得るのだ、という手本と
してくださっていることである。
永遠の王、不滅にして目に見えない神。
そして唯一の存在である神に永遠にほまれと栄光があ
りますように。アーメン。

〈第1テモテ1章15～17節〉
(S・S・A・T・T・B)

ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲

カンタータ第34番“ああ永遠の炎、愛のみなもと” BWV34

初演：1726年（原作・BWV34a・結婚カンタータ）、
1740年初め（改作・BWV34・ライプツィヒ）

用途：聖霊降臨節第1祝日用

聖句：書簡、使徒行伝2章1～13節
福音書、ヨハネ14章23～31節

歌詞：作詞者不明

この、踊り出したくなるような楽しい三拍子には理由がある。そもそもこのカンタータの原曲は、ある人物の結婚式のために作曲された「結婚カンタータ」、すなわちおめでたい雰囲気になり満ち満ちた音楽だったのだ。その祝典的な気分をそのまま神への祝福へと転移させたバッハのひらめきは流石だ。そしてその陰で、原曲の音楽にピッタリする聖句の内容を盛り込んだ歌詞を作りだす仕事を任された台本制作者は涙ぐましい努力をしたらしい。

1. Chor

O ewiges Feuer, o Ursprung der Liebe,
entzünde die Herzen und weihe sie ein!
Laß himmlische Flammen durch dringen und
wallen,
wir wünschen, o Höchster, dein Tempel zu sein.
Ach! laß dir die Seelen im Glauben gefallen!

2. Recitativo (Tenor)

Herr, unsre Herzen halten dir dein Wort der
Wahrheit für.
Du willst bei Menschen gerne sein,
drum sei das Herze dein; Herr, ziehe gnädig ein!
Ein solch erwähltes Heiligtum hat selbst den
grösten Ruhm.

3. Aria (Alto)

Wohl euch, ihr auserwählten Seelen,
die Gott zur Wohnung ausersehn.
Wer kann ein größer Heil erwählen?
Wer kann des Segens Menge zählen?
Und dieses ist vom Herrn geschehn.

4. Recitativo (Bass)

Erwählt sich Gott die heiligen Hütten,
die er mit Heil bewohnt,
so muß er auch den Segen auf sie schütten,
so wird den Sitz des Heiligtums belohnt.
Der Herr ruft über sein geweihtes Haus
das Wort des Segens aus:

5. Chor

Friede über Israel!
Dankt den höchsten Wunderhänden,
Dankt, Gott hat an euch gedacht.
Ja, sein Segen wirkt mit Macht, Friede über Israel,
Friede über euch zu senden.

1. 合唱

おお、永遠なる火よ、愛のみなもとよ、
私たちの心に火をともし、私たちの心を神聖なものに
してください。

おお、いと高き者よ、私たちは天の炎をくぐりぬけ、
あなたの神殿に祈りを捧げたいのです。

ああ、私たちの魂を、信仰のゆえに受け入れてください。

(合唱・トランペット I, II, III・ティンパニ・オーボエ I, II・
弦楽器・通奏低音/244小節・ニ長調・4分の3拍子)

2. レチタティーヴォ (テノール)

主よ、私たちの心は、あなたの真理の御言葉をあなた
の前に捧げます。

あなたは人間とともにいますことを好まれます。

この心は、あなたのすまいですから、主よ、恵みをもっ
てお入りください。

この選ばれた聖所は、最も大きな榮譽にあずかるので
す。

(テノール・通奏低音/9小節・口短調—嬰へ短調・4分の4拍
子)

3. アリア (アルト)

幸いなるかな。

神がすまいとして選ばれた、汝らの魂よ。

だれがこれ以上の幸いを選ぶことができようか。

だれがこれほどの祝福を語る事ができようか。

これは、主の御手によってなされるのである。

(アルト・フルート I, II・弦楽器・通奏低音/72小節・イ長調・
4分の4拍子)

4. レチタティーヴォ (バス)

神が聖なる^{とまや}苦屋を選ばれ、幸いとともに住まうのであ
れば

神は、そこにも祝福を注がれ、

そのことが神聖なる座の報いとなるであろう。

主は、聖別を与えた自らの家に

祝福のことばを高らかに叫ぶであろう。

(バス・通奏低音/8小節・嬰へ短調—イ長調・4分の4拍子)

5. 合唱

イスラエルの上に平安を!

神の御業^{みわざ}に感謝しなさい。

神が、私たちを守ってくださっていることに感謝しな
さい。

まさしく、神の祝福は力強い。イスラエルの上に平安
を。

私たちに、平安をお与えください。

(合唱・トランペット I, II, III・ティンパニ・オーボエ I, II・
弦楽器・通奏低音/88小節・ニ長調・4分の4拍子)

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 10周年のあゆみ

1. 合唱団設立の経過

昭和51年7月、盛岡市の岩手県民会館において、故浜田徳昭氏指揮により、「マタイ受難曲」の演奏会が行われました。これは、演奏会のために組織された「マタイ受難曲を歌う会」他の演奏によるもので、演奏会終了後は解散することになっておりました。しかし今後も継続して合唱活動を続けたいという有志達によって、バッハの教会カンタータを取り上げ息長く活動することを目的として結成されたのが、「カンタータを歌う会」でした。名称は後に改められ、今日の「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」になりました。

指揮者の候補を検討する際に、香川嘉尚氏によって御紹介いただいたのが、当時芸大大学院生であった佐々木正利先生です。先生は自らが発起人として組織された「芸大バッハ・カンタータ・クラブ」の指揮者をなされており、日本でも有数のバッハの演奏団体に育て上げておられました。

地元出身で、しかも、すぐれた声楽家としての素質を持たれる先生を指導者としてお迎えできたことは、真に幸いなことでした。

2. 活動の状況

(1)創設期

佐々木先生には、毎月一回、土曜日に東京からお出でいただき、日曜日に練習をして、夜行で帰京というハードスケジュールが、52年2月から4年間続きました。この時期は、バッハの教会カンタータの何たるかを学んだ、基礎づくりの時期でありました。

また、小林道夫先生と、芸大バッハ・カンタータ・クラブを紹介していただき、共演の機会を与えていた

だいたことは、貴重な体験となりました。カンタータ・クラブの器楽メンバーには、蒲生克郷氏をはじめ、小畑善昭氏、田崎瑞博氏、李善銘氏、鈴木雅明氏等、現在も私達の演奏会の際に共演していただいております。

(2)基礎づくりの時期

佐々木先生が西ドイツに留学されることになり、指揮者として蒲生克郷氏に昭和55年から2年間、毎月一回指導していただきました。バイオリニストとして、佐々木先生とはまた一味違った御指導でした。尚、蒲生氏は、オーケストラのコンサートマスターとして不可欠な方であり、演奏会の度毎にお世話になっております。

(3)充実発展の時期

昭和57年4月、留学を終えられた佐々木先生は、岩手大学の教官として赴任されることになり、合唱団もようやく定住した指揮者の時代を迎え、活動も安定して、次第に活気に満ちてきました。

それは、「ヨハネ受難曲」に取り組んでから顕著に現われ、学生層を中心に会員が増え出し、充実してきました。そして、「メサイア」演奏会（一昨年の11月）、「宗教音楽の夕べ」（昨年4月）を経て、初の海外演奏旅行（昨年4月～5月）を実現したのであります。

毎回の練習日は、指導者の情熱と団員の熱気が火花を散らし、楽しくかつ充実した音楽づくりの時を持っています。これからも、息長く、よりよい音楽づくりを目ざして成長していきたいと願っております。

付記：本稿は、西ドイツ演奏旅行記念文集「KIRCHENMUSIK」の「合唱団のあゆみ」に手を加えたものです。
(木村吉彦 記)

～ 合唱団の歴史～

1977年2月27日	「カンタータを歌う会」として発足		
6月28日	「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称		
1978年2月26日	「バッハコンツェルト」カンタータ第45番、芸大と共演	指揮	小林道夫
1979年10月6日	「BACH ABEND」カンタータ第158・131番	指揮	小林道夫
1980年2月27日	「バッハの夕べ」カンタータ第80番、芸大と共演	指揮	小林道夫
1981年7月4日	「BACH ABEND」カンタータ第196・182番	指揮	小林道夫
1982年11月22日	「バッハの夕べ」カンタータ第158・4番	指揮	佐々木正利
1985年3月16・17日	J.S.バッハ生誕300年記念演奏会「ヨハネ受難曲」 (仙台宗教音楽合唱団と合同演奏)	指揮	佐々木正利
1985年11月3日	仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」	指揮	佐々木正利
1985年11月29日	G.F.ヘンデル生誕300年記念演奏会「メサイア」	指揮	佐々木正利
1986年4月11日	「宗教音楽の夕べ」シュッツ「ドイツ・レクイエム」バッハ「モテット1番」他	指揮	佐々木正利
1986年4～5月	第1回西ドイツ演奏旅行	指揮	佐々木正利
1986年7月11日	「東京ゾリステン演奏会」共演、ペルゴレージ「スターバト・マーテル」	指揮	赤松 安

この他、クリスマス・チャリティコンサート、チャペルコンサート、合唱祭等に出演。

～ 団員紹介～

《ソプラノ》

泉谷麻利子	泉山尚子	井上育子	遠藤澄江	及川芳里	及川彩子
大内京子	小川牧子	柏百合子	金子亜貴子	菊池節子	久保木万喜子
昆野敦子	○斎藤純子	坂巻奈美恵	沢田東子	高橋由華	田村洋子
戸蒔優子	新沼理恵	●藤田育世	古内敬子	松村寿子	村上伊久子
柳田松子	矢幅嘉子	吉田真由美	畑山由佳		

(仙台宗教音楽合唱団)

《アルト》

阿部怜子	井上未由子	及川留美	小笠原未知	小野成美	○雁部伸枝
菊池美樹子	●北山祐子	木村千秋	桐原絹子	佐々木志保子	佐々木久子
高橋尚子	武田敏恵	千葉真名	土田潤子	堀美知子	盛山智美
山口洋子	吉田由香里	米田茂子	Evelyn Olson		

《テノール》

●阿部実	飯島隆	太田穎則	織田靖夫	昆和宏	佐々木和哉
○佐々木朋也	佐々木幹雄	鈴木貴俊	鈴木康之	竹田光宏	中野寛司
★山本陽一					

《バス》

安藤徳文	稲葉正俊	魚住英昭	☆小原一穂	○小原浄二	●賀川宏之
片野嘉明	木村吉彦	佐藤智一	村上敦司	矢口尚	

{ ☆. コンサートマスター、★. サブ・コンサートマスター、○. パートリーダー }
●. サブ・パートリーダー、♪. 練習オルガニスト

～ 会 員 募 集 ～

只今盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは会員を募集しております。合唱経験の有無、個々のレベルについては全く問いません。現会員は皆それぞれに目標をもって努力しています。合唱が好き、音楽が好きというのが唯一の入会条件でしょうか。バッハの音楽は決してかた苦しいものではなく、人間味あふれ、ロマンティックですらあります。皆さん、私たちと一緒に歌いませんか。

どうぞお気軽に練習会場に直接おいで下さい。

- 練 習 日 毎週火曜日PM 6 : 30～ 9 : 00
- 会 場 カトリック志家教会礼拝堂
- 練 習 曲 目 J. S. バッハ作曲
「ロ短調ミサ曲」
- 連 絡 先 41-1507(木村)・46-5269(菊池)

～ 次 回 の 演 奏 会 の 予 定 ～

1988年 3月12日(土) 盛岡・県民会館大ホール PM 6 : 30開演
3月13日(日) 仙台・市民会館大ホール PM 6 : 30開演
曲目/J. S. バッハ作曲 「ロ短調ミサ曲」

